津奈木

発行所
津奈木公民館
芦北郡津奈木町
電話(78)3111㈹
印刷所　旭印刷
電話(水俣)㉝4101番

秋に文化の香り高い

津奈木町文化協会理事長　山下　茂

秋空に真白い雲が流れ、菊の花が咲く頃になると、いろんな芸術や文化の祭典が開かれる。

人々が人生を心豊かに楽しく生きる方法として、色んな形で活動をしています。大ざっぱに言ってスポーツ外の形を文化と言えましょう。

津奈木町でも昭和57年に文化協会が生まれ、春のえびね展と秋の総合発表・展示会を実施して居ります。九回目です。

今年も十一月十～十一日にBGと改善センターで行われます。

会員が一心に積み重ねた成果を一堂に展示・発表しますので、町民の皆さんも是非御出でいただいて励まして下さい。

出品・発表できるのは、文化協会の会員であることが条件ですが、自分も何か始めてみたいと思われる方はどうぞ遠慮なく申し込んで下さい。

申し込み先は、教育委員会か各部の責任者で結構です。会費は年間二〇〇円となっています。

一人でも多くの方が文化協会に加入していただき、一人でも多くの方が文化祭に出品・発表して下さるよう祈っています。

私は旅が好きで、よく旅行をします。東北へ行ったとき、平泉の毛越寺ではガランとした広大な境内に「夏草やつわものどもが夢のあと」の石碑が建っていました。

栄華を極めた東北一の英雄藤原三代の夢。跡形もない境内を見た俳人松尾芭蕉は十七の文字でこう表現しました。又、最上川の滔々と流れる様を「五月雨を集めて早し最上川」と詠んだ石碑が建っています。

旅をしながら、心に映ったものを俳句で表現した芭蕉の文化は今日でも人々の心を打ちます。

文化とはこんなものでしょうか。事難かしい事を考えようとは思いません。人が生きていく上で、ただ食事をし眠って終わるのではなく、生きていく流れに美しい花が一輪浮いて流れる様に、生活の中に心を豊かにしていく何かを持とうではありませんか。

生け花でも習字でも日舞或いはその他、あなたが人生を豊かにする何かを見つけてみませんか。

津奈木町文化祭も九回目を迎えて、一応軌道に乗り順調に運営されるようになってきました。

もう一歩前進するためには、町民の皆さんが会員となって益々充実して行く事が重要ではないでしょうか。

一言

佐藤垢石が或日、例の「日本第二の馬鹿」と大書した笠を被って、橋の下で釣をしていたら、橋の上から見物していた閑人がこう聞いた。

「おじさん、笠に『日本第二の馬鹿』と書いてありますが誰のことですか。」

垢石はすかさず

「俺だ。」と答えた。

「ほほう、すると第一の馬鹿は誰ですか。」

「お前さんだ。」

「え？」

「お前さんが日本第一の馬鹿だよ。」

見物人は妙な顔して立ち去ったが、考えてみると全くその通りである。何時になったらかかるのか皆目見当のつかないのに、じりじり焼きつけるような太陽の下で、今か今かと浮子を見つめている奴を見ると、暢気を通り越して馬鹿な奴だと言いたくもなる。その馬鹿を、じいっと見ている奴はもっと馬鹿だというより外はない。

夏目漱石は、どこに越しても世の中は住みにくいと悟った時絵が生まれて詩が出来ると喝破したが、この日本第二の馬鹿も、どうやらこの類の人種のようだ。

スポーツの秋
町民体育祭の最後を飾る陸上競技大会

天高く、さわやかに秋を渦喫、体育の日の十日、久々に雲一つない秋晴れの下で町民体育祭の最後を飾る陸上競技大会が、総合グラウンドで、町民の融和と健康づくりをめざし、町民総出のなごやかな大会が繰り広げられました。

今年も、昨年に引続き、競技種目の変更を考えてみてはどうかとの意見で、「高校生リレー」を「ムカデ競争」に「お手玉運びリレー」を「ボール運びリレー」に「29才30才40才リレー」を「20代30代、40代50代二人三脚」に変更。各地区の選手の皆さんは全力を出して競技にあたり多大な成果を収め、中には珍プレーもあり、笑いの中に楽しい一日を過ごしました。皆様のご協力に深謝します。

平成２年度町民体育祭総合得点表

番号	種目、月日＼地区名	竹中	染竹	浜崎	桜戸	町中	新川	古川	大泊	中尾	古中尾	倉谷	内野	上下門	川内	福浦	平国上辻	平国下	日当	日添	小奈木津
1	5月13日 男子ソフト	14	8	7	5	8	8	5	14	20	8	8	11	5	8	8	11	5	11	11	17
2	5月13日 女子ミニバレー	11	11	8	11	5	14	8	5	5	8	20	8	14	5	8	8	11	17	8	8
3	8月13・14日 野球	11	5	8	5	5	8	11	11	11	5	17	8	20	14	14	8	8	8	8	8
4	8月15日 競舟	24	13	15	13	13	18	15	28	18	24	22	27	22	18	27	27	22	29	30	22
中間得点		60	37	38	34	31	48	39	58	54	45	67	54	61	45	57	54	46	65	57	55
中間順位		4	18	17	19	20	12	16	5	9	14	1	9	3	14	6	9	13	2	6	8
5	陸上競技	8	12	10	13	1	7	5	19	16	4	11	3	14	2	17	7	16	18	20	9
総合得点		68	49	48	47	32	55	44	77	70	49	78	57	75	47	74	61	62	83	77	64
総合順位		8	14	16	17	20	13	19	3	7	14	2	12	5	17	6	11	10	1	3	9
陸上	総合得点	107	127	116	140	61	106	105	184	161	102	120	91	147	63	163	106	161	180	223	111
陸上	総合順位	13	9	11	8	20	14	16	2	5	17	10	18	7	19	4	14	5	3	1	12

年齢フリー
1500mで力走する
各選手

町誌編集室から
ゆだれの出る禁制品

大明神とお諏訪さんの秋祭り(江戸時代、秋の収穫が終ったあと行われた)の人だかりを当てこんで、町から商人共がドッと繰り出した。

祭ではないが、初夏四月の影踏(エフミ)の時も老若男女が集められて、キリストの像を踏まされていた。影踏は後では形骸化して、お祭りのように休息日のようになった。

その時代、財政も経済も貧しくて、アレをしてはいけない、ソレを身に着けてはいけないと、百姓は庄屋から常会のたびに、耳にタコができる程聞かされていた。

木綿は衣類はおろか、襟・帯・袖縁・羽織の紐・懐中物にも使ってはいけない。

髪の道具では、木櫛、角(ツノ)製か鯨の骨の笄(コウガイ)もダメ。

踏みものは、下駄、雪駄。許されてない者で脇差、傘、合羽、菅笠の着用はまかりならぬ。

貧富にかかわらず、藺畳、欄間違い棚、長押(ナゲシ)、釘隠、美麗の建具はいけない。などご禁制の事項はこのほかまだ一杯あった。

ところが、文政の初めの頃(一八二〇)ご禁制のおいしそうな品々を、影踏のときに商人共が持ち込んで並べたもンだから、売れるワ売れるワ。

早速、文政七年二月、その年の影踏の時期を前にして「御免外の品、在中へ特越申さざる様…」との達しが出された。

しかし、この年と翌年の二年間は威令が届かなかったと見え、文政九年三月、「御郡方御奉行中」から、祭礼の時は特例を認めるけれど、それ以外は「在中へ極め外の品々持越し商売いたし候儀決して叶い難く…」とキツイお触れが出てしまったのである。

それでも、小国、久住、野津原鶴崎は、他領と入り交っているので、禁制は緩やかであった。それ以外の住民にとっては知らぬが佛で、粗末な生活を強いられていたのである。

日本では飽食に耽っている時、今でも禁制品を喉から手の出るほど欲しがっている国もある。二百年前、禁断症状の時期が日本にもあったことを忘れてはなるまい。

編集後記

▼文化の秋、スポーツの秋たけなわのとき、皆様各種行事に進んで参加して下さい。前記の文化祭を盛大にするためにも、文化各クラブへの加入、お手持ちの力作の出品など遠慮なくどうぞ。今からでもおそくありません。チャレンジしてみて下さい。

▼町民体育祭の全種目とも盛況裡に終了。また来年の頑張りを。

地域をおこす人々(12)
地蔵祭を通じて社会活動につとめる
高橋建設　高橋美亀夫社長さん（75才）

本町内野の日野越から倉谷、古中尾に通じる三叉路に立派な地蔵堂が建っています。これは高橋建設の高橋美亀夫社長さんの善意により建立されたものです。

地蔵さんの由来はよくわかりませんが、道路改修の都度移転を余儀なくされ昭和五十八年に現在地に移り、昭和五十九年六月二十四日立派な地蔵堂が落成、やっと安座されたのであります。そして道行く人々がそこに立止まり手を合わせる光景が見られるようになりました。

宇土市では子どもたちの運営による地蔵祭が伝統的行事として行われていますが、高橋社長さんはこのことに思いをいたし、こちらでも地蔵祭をやってみたいと計画され、毎年八月二十四日に地蔵祭の諸行事が行われ、本年は九回目を数えております。内野、倉谷地区の老若男女数十人が参加して楽しく賑やかに続けられています。

行事として、子ども会の皆さんへ豊かな心をもった明るい人間に成長することを願って社長さんの熱意に満ちたお話、また交通安全に最大の注意を払い尊い生命を守る態度の育成について力説され、日常習慣化のため交通安全いろはカルタを子ども会に寄贈されています。お友だちの童話発表にも真剣に耳を傾け有意義な一時を過しています。また、先年にはめずらしい紙芝居に一段と興味が集まっていました。更に、伝承遊び教室も催され、高齢者が先生になって竹馬、足半、竹トンボ等の作り方が子どもたちに伝承されました。

高齢者と子どもたちとの楽しいふれあい、子どもたちの真剣な眼差し、できあがった喜びを体験し嬉々とした子どもたちの姿は大変きれいなものです。

高齢者の健康増進のためゲートボール大会も実施され、大きなトロフィーめざして熱戦が展開されています。最初は二チームでしたが、本年から古中尾、中尾チームも加わり、四チームでリーグ戦を行い盛大な大会となっています。

高橋社長さんは地区の皆さんと力を合わせ、今後も地蔵祭を続けて行きたいと言っておられます。

ブロンズ像「はぐれっ子」
故　岩野勇三　作

「どうしたの。」
「遊んでもらえないのかな。」
「勇気を出して、声をかけてごらん。きっと仲間に入れてくれるよ。」　「さあ、勇気を出して。」
遠い昔の懐しい風景が想い出される。かけまわった山野の声が聴こえてくる。
あの頃は、すべてが、雄大で永遠に続いていた。　（T）

庁舎美術館(32)

読書感想文
「消えないまぼろし」を読んで
赤崎小学校五年　岩崎周子

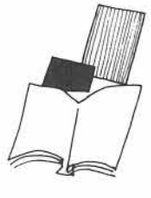
私は「消えないまぼろし」と言う戦争の話を読みました。ひろしと言うお兄ちゃんと、弟の武志の男の子二人がでてきました。

「お父さんは、りっぱな軍人だったんだから、武志もしっかりしなさい。」

武志は、小さい時、おじさんによくそう言われて育ちました。その時、副官でした。そして、とうとう戦争に行く時が来ました。その時、武志たちは父と別れるのがとてもさみしかったと思います。武志たちの父はこわそうな顔をしていたけど、とてもやさしい人でした。その父も、戦争で戦死するかもしれません。なぜ、こんなこわい戦争をするのでしょう。戦争は、人々を殺して喜んでいるようです。こんなことをして恥ずかしいと思わないのでしょうか。やっぱり武志たちの父は戦争でなくなりました。

家に帰って来たのは生きている時のあのやさしい父ではなく、遺骨になり、箱の中に入った父でした。私が想像していた以上に武志たちは悲しみました。まもなく、母も病気でなくなりました。父の死が、母の死を早めたのだと思います。武志たちにとって両親の死は、とてもつらく悲しかったと思います。私たちみたいに、両親そろっているのがいいにきまっています。

今、日本は戦争がないので平和でいいです。でも外国では、現在、国と国が争っている所があるので、沢山の人々がきずついているかもしれません。一日も早く世界中から、争いがなくなり、平和になればいいと思います。



就任にあたって
教育長　山下　和

此の度、谷口教育長の御勇退の後を受けて、教育長の職を引受けることになりました。前教育長の謹厳実直で緻密な教育行政を行ってこられた後を受けて、果して充分な仕事が出来るか危惧の念で一杯ですが、事務局を始め教育委員の皆様の御指導と助言で、遺漏のない様に勉強して行く所存でございます。

さて、現在の日本は国民の努力によって半世紀を経ずして世界一の金持ち国と言われる程、物的に豊かな国になりました。毎日の生活で戦中戦後を経験した者には、これでいいのだろうかと思う程、贅沢な世の中になりました。

「衣食足りて礼節を知る」と先人は言われましたが、このことは現在の世には適用しない諺なのでしょうか。私は今こそこのことを、幼児の時から頭の中に叩き込んでおかねばならないと思うものの一人です。

「礼節」この言葉は殆んどの学校が、校訓として掲げています。それ程大切なものであり、実行されにくい難しい事だと思います。人と人は勿論、社会、国家お互いに気持ちよく平和な生活のできる環境を創るためには、礼節を抜きにしては成立致しません。

胎教に始まり、幼児教育、家庭教育、学校教育、社会教育、そして生涯学習と、此の世を去るまで学ばねばなりません。特に子供の躾については、保護者の最も意を払わなければならない事です。

身を美しくと書いてしつけと読みますが、心を美しくする事こそ、保護者の責任です。学校にまかせきりにするのでなく、家庭での躾を特にお願い致します。

つ―つよい子　―元気
な―なさけ深い子―おもいやり
き―きのつく子　―かしこい

この三つを目標に手をつなぎ、よい子供が大勢津奈木町に育ちます様、協力して努力致したいと思います。

「S君」
農中　三澄

S君は、私がH町のN校で、高等三年を二回目に受持った時の生徒であった。頑強な体格の持主で、喧嘩をしたら誰にも負けなかったが、友達は一人も無かった。いつも一人ぼっちだった。皆が校庭でわいわい騒ぎながら遊んでいても、彼が近づくと何時とはなく一人も居なくなってしまうのだった。

或日、私が級長にこっそり「どうしてS君を遊び仲間に入れないの？」と尋ねると、「S君は、ちょっとしたことに言いがかりをつけて喧嘩をしかけるのです。そのため皆嫌って、いつの頃からか、彼のそばにはよりつかないようにしているのです。」と言う。困ったことだ。このままにしていたら、S君は駄目になってしまうと思った。そこで、或日の放課後こっそり彼を呼んで、人知れず「S君の友達は誰れ？」と聞いてみたら、友達はないと言う。「淋しくはないか」とか、「友達はほしくないか」とか聞いても堅く口を噤んで返事をしない。普通の行動からみて、確かに友達はほしいと分っている。「何故友達がいないの？考えてみたことがあるか」と聞いてみたが、やっぱり返事がない。「皆が君を嫌っているのではないか」と口をすべらしたら、偉い剣幕で「誰が私を嫌っているのか。何故嫌うのか」と奥歯をギリギリ噛みしめながら食ってかかった。私は吃驚し、たじたじとなった。そしてこの生徒には反省ということが全く欠けているのではないかと思ったが、彼も人の子何時かは自分というものがどんな姿か気付く時があろう。然しそれを待っていては追いつかない。今の中に内省の態度を育ててやらねば駄目だと思った。そして少くとも私一人は彼の友達になってやろうと思った。

それから一年。翌年の三月には彼も実社会に巣立って行った。そして日町のある魚屋の小僧になった。狭い町であってみれば、卒業後町中で、教え子達ともよく出会っていたが、彼程、行き交う毎に、明るく元気よく、心から挨拶する教え子はいなかった。一年前の彼からは、想像もつかない変貌であった。

数年後、日町が日市となった頃私は遠い漁村の小さな小学校に転任したが、その年の十二月には大東亜戦争が勃発し、教え子の消息も何時の間にか途絶えてしまった。あれから五十数年経った。S君が達者でいたら、もう七十才を超した筈である。

どうしたことか、魚屋の小僧時代の彼の元気いっぱいの明るい顔が脳裡を頻りに去来する今日この頃である。

短歌
宮崎　優　選

位置しめて下駄箱に尚残りいる亡き夫の靴ブラシをかける
ひび割れし稲田わずかに湿らせて秋立つ空に遠きいかづち
寺本　ツルヲ

真夏日に白銀の葉の初雪草ゆらゆら揺らぐ涼風を見る
夏祭りの舞鶴太鼓たくましくハッピ姿の甥たたきいる
福田　八重子

夏の間を咲ききて紅きさるすべり夕べかすかに風にゆれいる
クラス会へ誘いし時の友の声急死のあとも受話器にのこる
野田　浦子

離乳食たべそめし孫のうれしげに笑えば白き歯の二本みゆ
流れる汗眼に沁みわたる畑中の茂る夏草ひた刈り急ぐ
西　滋子

にが瓜の苦味口腔に広がりて吾が人生を振り返りみる
夜明け前の闇とふドラマ青年のあり苦境に真向う
白浜　美和子

夢の中みちを教える父母の顔墓参おこたる吾をとがむる
夕涼み海面に灯足ゆらめきてそよ風肌に秋をしのばす
柳迫　いづも

夢でもよし亡き父母と膝を交え語りて見たしつもる話をあら草の茂れる土手に抜きいでてからくれないの鬼百合の咲く
鳥井　保

長月の月の光の射し入りて洋間の蘭はみどり浮きたつ
朝茜ひむがしの空刻こくにうつろい見いり世相を思う
宮崎　優

「短歌一口メモ」二首の中に蛇足説明、理屈、重複があってはいけない、作者の事情や立場、理由が表面に出るのは避けるべきで、歌の響き調べの中に蔵され読者に伝う。

肥後狂句
堀　双岳　選

ふの良かよ、嫁さんがまたよか人で
良か機嫌、どじょうすくいのアンコール
林田　万葉

ふの良かよ、良か嫁女もらいだし
良か機嫌、裸おどりもやりかねん
鳥居　雲波

ふの良かよ、丁度おはぎのできとった
よか機嫌、隠居の菊が一等賞
堀　双岳

やさしいお方、心配無用、一笠二句、十一月末まで。
次笠